

育てたい理学療法士

「思い」に向き合う

日本ではここ数年、怪我や病気などによって障がいを持つ人々に対して、一方的に差し出す「与える医療」ではなく、心を通い合わせながら共に歩む「支える医療」が求められるようになってきました。理学療法士は、その中心的な役割を担う専門職と言えます。

本校の理学療法学科は、向き合う相手の状況・変化に「気づく」力を持つ理学療法士を育てることを、大切に考えています。一人の患者さんを前に、抱えた思いを理解しようとする懸命になり、わずかな変化を見逃さず、会話以外のしぐさや表情から心情を推し量ろうと努める。そうした姿勢で現場に臨むことのできる人材の育成に、本校は力を注いでいます。

理学療法の現場で向き合う対象者は、年齢や、病気の種類がさまざま、置かれた状況もそれぞれ異なります。突然の疾患や事故によって、身体の一部が正常に機能しなくなったことで、絶望感に打ちのめされ、リハビリテーションに前向きに臨むことの難しい患者さんも少なくはありません。

そうした時に、理学療法士が、相手の立場に立とうとし、その痛みを自分のものとして感じようとし、相手を理解しようと必死になる。その上で相手に合った対応を模索し、やさしい気持ちで臨む。そして、共に克服しようとする。その姿勢そのものが、患者さんの気持ちを支えます。だからこそ、本校はそうした心のあり方を、何よりも大切に捉えています。

対象者の問題を見定める洞察力と、共に回復を目指す心とを、バランス良く身につけることで、本当の意味で「相手に向き合う」ことのできる理学療法士として羽ばたくことができると考えているからです。

オーダーメイドを提案するために

一方で、専門職として確かな知識や技術は不可欠な要素です。ですが、これらは、相手にとってのベストをもたらすための手段であって、その習得が目的であるわけではありません。また、知識や技術の使い方は、患者さん一人ひとりによってそれぞれ異なり、汎用性のある正解が存在するわけではありません。それだけに、まず相手のことを一生懸命に考え、何を求めているのかを理解する。その上で、その人の生活を向上させる提案を行うということが大切なのです。

知識や技術は単体で存在する限り、大きな力を発揮しません。あらゆる知識と技術を組み合わせ、応用しながら、相手にとってのオーダーメイドを提案する。それが、理学療法士にとって、きわめて大切な姿勢だと本校は考えています。

思いに向き合い、共に歩む医療は、「心」と「知識・技術」の両方を持ち併せた上で、知識・技術を深いところまで理解・把握し、それらを相手のために活かして、初めて実現できるのです。

チームで行われる医療のリーダー的役割を担い、現場をあるべき方向へと導くことのできる理学療法士を育てることをめざしています。



「飽くなき向上心」が切り拓く道

理学療法の現場においては、「もっとと技術が高かったら治せたかもしれない」「自分の力が足りないばかりに」など、無念な思いにぶつかる場面は決して少なくありません。

本校理学療法学科の教員の一人は、患者さんの「担当を替えてほしい」という要望を間接的に聞かされたことがあり、自分の無力さを痛感したという経験を持っています。こうした場面に直面した時、重要となるのは、「次」に活かす上で何ができるか、を考える力です。

それでも患者さんにとってのベストを探したい、と前に進み続けるために必要なのは、悔やむ気持ちではなく、悔しさをエネルギーに変えて、同じあやまりをくりかえさない強い意志です。

本校では、自分の行ったことをきちんと振り返り、そのなから具体的な課題点を見出し、次の機会に結びつける習慣を、すべての学生が身につけられるように工夫を行っています。実習や演習、ふだんの授業といったさまざまな学習の機会に、正解を導き出せない状況下において、決して妥協せずに答えを追求する姿勢そのもの

を、本校は高く評価します。

また、理学療法の分野では技術の進歩・発展が目覚ましく、先端技術は常に新しいものへと更新されます。こうした日進月歩の世界にあって、決して現状に満足し、立ち止まることなく、さらなる知識・技術の吸収に向けて最大限の努力を注ぐ向上心も、きわめて大切なものです。知識や技術を、ひいては自分自身をもっともって高めていきたいと願う飽くなき向上心を、高めていける教育現場であることも、本校の役割と捉えています。

生活のクリエイターとして

本校の理学療法学科が大切にしているもうひとつのことが、自分で考え、自分で行動する姿勢です。

理学療法士の仕事は、患者さんの症状を治癒・軽減させることのみにとどまるものではありません。

「患者さんの内面を理解し、思いと向き合った上で、これからの生活を創造していく力が求められる。新しい生活のイメージを描き、仮説を立て、そこへ向かう。そうしたクリエイティブな能力が必要などころが、理学療法士という仕事のひとつの特徴です」（理学療法学科・

北浜伸介学科長

例えば、「肩が上からず生活していく上で困っている」相手に対して、仮にすぐに治すことができなくても、今よりも快適な生活を創造するための模索を行うことは可能です。悩みのひとつが、洗濯物を干すことができないことであれば、干し方を工夫したり、安全な踏み台を用意したりすることを提案する。歩けなくなった患者さんが、一人で自宅で生活していくために、生活スタイルを新しい発想で考え直し、「○○の部分をこうしていけば△△ができるようになる」というような提案を行う。その提案の実践が困難であれば、さまざまな社会資源を活用しながら補う方法を考える。

それぞれの相手の状況に合わせて、妥協せずベストの答えに向かって道を切り拓いていく姿勢、それが、本校が育てたい理学療法士の基本です。

地域社会の明日を創る

患者さん一人ひとりの「思い」にしっかりと向き合い、知識と技術を総動員した上で、相手にとってのオーダーメイドを提案する。どんな場面にあっても妥協せず、答えを追求する姿勢を持ち続ける。こうした理学療法士が増え、先頭を行くリーダー的な意識を持ってチームを導いていくことで、地域の医療福祉の現場は、あるべき姿を描くことができます。

そして、そうした意識を持つ理学療法士が増えていくことで、向かうべき方向へ近づいていくことができる。

そうした未来を担うひとりを、本校は育てていきたいと考えています。

理学療法士は長いあいだ人材不足の状況にありました。しかし、高齢化社会が到来し、社会保障が大きな課題となるなかで、平成12（2000）年以降、養成校開設の規制緩和を受けて養成校が急増し、理学療法士の人数は平成24年に10万人（平成14年は3万3415人）を超えました。

そして今後も、毎年1万人の理学療法士が増えることが予想されます。そうした状況下において、資格を有するだけでなく、「プラスαの力」が大切になります。

本校は、現場での実践能力に加え、自分で考え、さまざまな要素をマネジメントしていける力こそが、理学療法士が新たな活躍する領域を切り拓き、明日を創ると考えています。